

池内紀

こゝろは

笑いの文章読本

の演

芸館

白水社

笑いの文章読本 池内紀

こゝろはの演芸館 池内紀

白水社

ことばの演芸館 笑いの文章読本

定価一五〇〇円

著者略歴
一九四〇年生
一九六五年東大大学院修了
独文学専攻
都立大助教授

主要著書

「眼玉のひっこし」「諷刺の文学」

「喜劇・人間百科」

「ウィーンの世紀末」

「世紀末と樂園幻想」

「温泉」

主要訳書
クラウス「人類最期の日々」

「アフオリズム」

カネツティ「眩暈」

「アメリ」「さまざまな場所」

「ガレット先生失言録」

著者

◎

池

内

紀

発行者

高

橋

孝

印刷者

青

木

勇

発行所

株式会社

白

水

社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部 〇三〇七七八一一

編集部 〇三〇七七八一一

振替東京 九一三三二二八

郵便番号一〇一

一九八三年一〇月三〇日印刷
一九八三年一二月一〇日発行

精興社印刷・加瀬製本

ISBN4-560-04145-8

ことばの演芸館

笑いの文章読本

ことばの演芸館 笑いの文章読本 ● 目次

笑わない男たち 笑いの生理 7

ハムレットとクレオパトラ パロディ指南 31

小言幸兵衛 註解の技法 59

鼻から鼻へ さまざまな意匠 77

中入り 小列伝 117

往來の詩人たち 口上の美学 123

笑う風景 「象さん」の大きな背中 137

新映画時代 スター誕生 153

寸鉄の刺 アフォリズムの生理 191

百鬼園入門 『冥途』への道 207

ことばの演芸師 おいでよことば、ことばよおいで

実例一	赤と黒、あるいは菊池寛の『文章読本』	19
実例二	最初の一行、あるいは幻の名作	25
実例三	わが友ハムレット、あるいは文体練習	その一 44
実例四	クレオパトラの鼻、あるいは文体練習	その二 53
実例五	中也教入門、あるいは見立ての技法	その一 84
実例六	西洋文学料理講座、あるいは見立ての技法	その二 94
実例七	現代知識人の債務と責任、あるいは手紙の技法	100
実例八	当世ジャーナリスト気質、あるいはモノローグの技法	106
実例九	ストリップ考、あるいは対比の技法	112
実例十	映画博物館開館式、あるいは演説の技法	154
実例十一	諸国巡り、あるいはキネマ・パロディ見本帖	159

笑わない男たち

——笑いの生理

今は昔、京都の寄席笑福亭のことである。高座には桂文吾が座っていた。三代目、名人といわれた噺家である。だが、客席には三十人ほどの客がいただけだった。正確には、三十人ほどが残っていたというべきかもしれない。文吾が切席をとるときいつものことだが、決してぶつつけに噺にかからない。ぼつぼつとマクラを振る。ひとこと喋ると休み、またひとこと言っては目をつむるといったありさまで、その間、客のほうは大抵、あまりの辛気くさに堪えかねて、一人帰り二人帰り、多くて四、五十人、少ないときは十人ほどを残すだけになってしまったという。文吾はいわば客をふるいにかけていたらしいのだ。そして、ふるい残された聴き上手を相手に、おもむろに本筋に入った。つねづね、辛抱づよい客の一人であつたらしい中浜静圃が、次のような思い出を書いている。

「シトシトと筋を運んで行く渋味は、ジッと耳をかたむける聴き上手に助けられて、落語の本格的雰囲気を醸成した客席には咳の声さえない。時々込み上げて来る可笑しさに耐えかねて声を忍んで笑う人があるが、大口開いて笑うような客は一人もない。いずれも名人の至芸に完全に酔わされて忘我

の境に入っている。ト急に高座の名人は口を噤んだ。客はおとなしくうつむいて次の言葉を待った。が、彼はなお沈黙を続けている。

『？』

人々は期せずしていっせいに顔を上げて高座を見た。名人は堅く口を閉じてある一点を凝視している。この奇怪な挙動を解しかねて、聴客は不思議そうに彼の顔を見まもった。ややしばらく、やがて彼はスッと立ち上って客を見廻したが、突然片足を揚げて客席に足の裏を向けながら空洞な声で

『アハハハハ』

と笑った」(昭和十二年四月発行『上方はなし』第十二集)

名人文吾は狂ったのである。

狂ったのは桂文吾ひとりではなかっただろう。三代目柳家小さんは家人の心配をよそに、何日も公園にうろついているのを発見された。月亭文都は突然発狂して、膝までしかない水たまりで死んだ。桂文都は酒好きで甘いものなど見向きもなかったのに、ある日ひょっこり駄菓子屋にやってきて、驚くほどの菓子食い、金も払わずに出ていった。菓子屋が苦情を言ってきたとき、まともな返事のできない魔人であったそうだ。

有名と無名とを問わず、このような頭脳の故障をきたした噺家はけっこう多い。それは一般にいわれるように、芸人におなじみの酒や遊びが過ぎたせいだろうか。あるいは名人上手とうたわれたときのうぬぼれなり慢心なりが高じた結果だろうか。むしろそこに「笑芸」といったものの怖さがあるのではあるまいか。つね日頃、高座に上がったときだけではなく、日常生活までも「落語化」して、人

を笑わせるという奇妙な努力につとめているうちに、精神がしっぺ返しを受けたのではあるまいか。いわば笑いの殉教者といったぐあいに、である。

笑いがときには狂気に接していることについては別のところで述べるとして、ここではただ次のことだけを確かめておくとしよう。辛抱づよく文吾が本筋にとりかかるのを待っていた人々である。彼らにはときおり、おかしさが「込み上げて」きたようだし、そのたびに声を忍ばせて笑いをこらえなくてはならなかったというが、はたしてそのおかしさはいかなるものであり、その笑いは一体どこからきたというのだろうか。聴き上手を前にした話し上手の口を通して——といえはそれまでの話だが、単にそれだけのことなのだろうか。

もう一つ別の顔がまざまざと目の前に浮かんでくる。無声映画時代の喜劇役者バスター・キートンの能面のようにのっぺりとした白い顔である。キートンは一時代、チャップリンと人気を二分した売れっ子だった。「キートンの將軍」、「キートンの大学生」などとトーキー前の一時期の名作を数多く残している。

キートンの人気と成功は、とりわけ次の一点によったようだ。つまりこれは、いかなる状況に陥ろうとも決して笑わない男であった。彼は終始、白いのっぺりした能面づらでとおした。このキートンをめぐってスクリーン上になにごとが起ころうとも、彼は眉一つ動かさなかった。我慢して笑いをこらえているといったことではなく、この男には笑いそのものがきれいさっぱり抜け落ちていくかのようであった。腹をかかえて大笑いしている連中の只中で、そして同じく腹の皮をよじらしている観客を前にして、キートンひとり笑わない。キートンとした当惑顔をさらしている。この「笑わない

男」を前にして人々は笑いころげた。息をつまらせ、腹の皮をよじらせた。ついながら私がキートンを見たのは、ある映画好きが主催した名画鑑賞会のことで、人かげもまばらな公民館の映写機はオンボロ、まにあわせのスクリーンは波をうっていた。また、そのスクリーンにうつるギャグにしろ笑いの手口そのものは、当然のことながらおそろしく古風であった。にもかかわらず、われわれは結構たのしく笑ったのである。ガランとした暗い館内に、ときおり思い出したように間の抜けた笑い声が起こった。他人がみたら、それはすこぶる異様な光景だったにちがいない。

映画の本には書いてある。ある日、人々はキートンに飽きた。トーキー以後も傑作をつくりつづけたチャップリンとはことなり、キートンは忘れられ、いつしか無声映画時代の遺物となった。しかし、まあ、これは別の話である。

笑いだ、これは人間に独特のものでありながら、にもかかわらずなんともやっかいなしろものがあり、いかに分析困難であるか。それは哲学者ベルクソンの哲学的な『笑い』における味けない成果からもおなじみだろう。あの頭のいい劇作家マルセル・パニョルにしても、『笑いについて』と題した本によって文字どおりの笑いを論じたとき、ひどく図式化しないではいられなかった。

まったく、さまざまな笑いがある。笑いはしばしば、エロチシズムの隣にいるし、またしばしば、そしらぬ顔をして反抗精神とも隣合っている。のみならず笑いは、怪奇や驚異や不思議とも、さらには恐怖さえとも無縁ではない。

ところで、笑いの只中にいて笑わないのは名人上手の噺家や、そのかみの喜劇役者だけではなさそ

うである。さらにもう一人、ここにこんな男がいる。

たとえば、夜だとしよう。寒い冬の真夜中のことだ。外にはみぞれが降っている。ドア越しにすきま風でも入るのかストーブを焚きづめなのに部屋はさっぱり暖まらない。雨にくわえて風さえも出てきたようだ。ときおり、たてつけの悪いガラス戸が音をたて、大儀そうにカーテンがゆれる……。

べつにこんなに陰々滅々とした夜でなくてもいいのである。一転して春うららかな日曜日だとしよう。朝からよいお天気で、青空にアドバルンが二つ、のんびりと浮かんでいる。新聞は都心のデパートや郊外にくり出す人の波を伝えている。そういえばこの数日、絶好の行楽日和がつづいている……。そんなさなかに男がひとり、書きもの机を前にして坐っている。それが坐りなれた椅子であり、そこが籠りなれた部屋であることは、椅子の坐りぐあいなり部屋の汚れぐあいなりからもみてとれる。男はなんとも浮かぬ顔をしている。ときおり顎に手を添えるのは、歯が痛いからだろう。

彼が浮かぬ顔つきをしているのは、実のところ、歯痛のせいばかりではないのである。本を書かなくては何らないからだ。笑いをテーマとした、たのしい本を書かなくてはならない。この男はつねづね、笑いほど厳肅なテーマはこの世にないと信じてきた。そのことを人にも語り、みずからもあれこれ考えてきた。ながらく考えてきたところを、いま、いよいよ書こうとしている。いや、書かねばならぬ。

正直いうと彼はいま椅子に坐り、ペンを手に机に向かって背を丸めているよりも、同じことなら椅子をはなれてストーブに手をかざしながらぼんやりと背を丸めていたいのである。春うららの日曜日ならば、行楽の人の波に加わらないまでも、空に浮かんだアドバルンでも眺めていたい。あるいはせ

めても齒医者に出かけて齒痛のほうを退治したい。歸りにのんびり駅前を散歩してくるなど悪くない考えた。

だが、男にはいま、それができない。編集者がそれを許さない。彼はなんとしても書かねばならぬ。齒痛をこらえ、浮かぬ顔で、書きつづけなくてはならない——つまりが、笑いについて。当人がこの世でもっとも意味深いテーマだと考えていることについて。だからして冬の寒さをもっともせず、春のお天氣に目をつぶり、齒痛など齒牙にもかけず、せっせとペンを走らせなくてはならない。

ある動物学者の説によると、どの人にも、その人とよく似た動物がいるのだそうだ。熊に似た人はおおよそ熊がそなえている特性をのこらずもっているものだし、猿を思わせる人は、お尻の色の点は別にして、おどろくほど多くの特性で猿に似ているという。

そういえば昔、私はブルドッグであつた。そんなあだ名で呼ばれていた。略してブル君、ブルさんと言われた。『広辞苑』でみるとブルドッグは「犬の一品種。頭は大きく、口は幅広くて上に向き、背は低く、四肢は筋骨たくましい。外見は獠猛であるが飼主には忠実」などと書いてある。「番犬・愛玩用」だそうである。なるほど、思い当たるふしがいくらかもある。とりわけ「外見は獠猛であるが飼主には忠実」などころなどそっくりである。

間の悪いことに、道路をへだてた隣町に一匹のブルドッグが飼われている。ときおり散歩の途中、同じく散歩中のブル君と出くわすことがあるが、そのたびに私はどうも落ち着かない。そわそわして立ちどまり、わき目をふらず歩いてくるブル君を見やりながら、ほろにがく、もう一つのわが身を思

わずにいられない。

ブルドッグの方はチラッと上目づかいにこちらを見てから、つまらなそうに目をそらし、のっしのっしと歩いていく。そのうしろ姿を見送りながら、私はこう考える。人間は地上で唯一の笑う動物である。現に自分は、紐に引かれ、のし歩いているおまえを眺めて笑わずにはいられない。

そして実際、にこやかにほほえみながら、あらためて私は笑う自分を確かめた気持で安堵する。しかし同時に、なんとなく気にならないでもない。もしかするとあのブル君は、番犬用に役立たず、さっぱり愛玩にも堪えない人間を眺めて、心ひそかに笑っているのではあるまいか。少なくともあの不敵な面魂は、生粋のユーモリストにうってつけの顔である……。

とはいえ、言うまでもないことながら、私はいま隣町のブルドッグを語りたいわけではない。はじめに述べたように笑いを論じ、ついでにはユーモアとはいかなるものかについて考えてみようとした矢先に、ふとあのブル君を思い出したまでである。ただそれだけのことであるが、しかしながら偶然ではないかもしれない。というのは、先ほどあげたブルドッグについての『広辞苑』の説明が、ぴったりのままユーモアにも当てはまるような気がしないでもないのだ。

私の考えるところによれば、ユーモアの「頭は大きく、口は幅広く、上に向いて」いるし、「背は低く」ても「四肢は筋骨たくましい」のである。さらに笑いは人間の精神にとって「番犬・愛玩用」の役割を荷なっている。

しかし、それにしても笑いを論じるのはむずかしい。論じはじめたとたんに論じる自分の姿勢といったものに気がつくからだ。それはまさしくベルクソンが笑いをめぐる「おかしみの意義についての

試論」のなかでテーゼとした「こわばり」にはかなるまい。柔軟であるべきところに突如あらわれる機械的なこわばりである。それこそ笑いをさそうものであって、この点、笑いを論じはじめたりしようものなら、自分がはたして笑いを論じている当人なのか、それとも自分こそ笑いの対象として論じられるべき人間なのか、いったいどうなのか、わけがわからなくなる。

朝早くから夜おそくまで坐りづめだ。眠りのあいだにも考えている。つまりが——笑いについて。

目の前にペンがあり国語辞典があり白いままの原稿用紙がある。原稿用紙のマス目が口をひらいて待っている——ちょうど、歯科医の診察台に坐って口をあけている患者のように。パツクリ口をあけたきりの原稿のマス目が歯痛以上に私を苦しめる。こんなときである、なぜか不意にはるか昔のこと、網をもって野っ原で虫を追いまわしていた頃のことなどを思い出す。むしろに懐かしい。足音を聞きつけてやにわに虫がとび出してきた。トカゲが這い出してきた。鳥が空を飛んでいた。いっぽう今の私には、ことばの野原が死にたえたように静まり返っているばかりだ。何十回も往きつ戻りつしたというのに、虫はとび出してはくれないし、トカゲが這い出すけはいがない。空に鳥影すらかすめない。

古典ギリシアの哲学者アリストテレスは人間を「笑う獣」と定義した。人間についてさまざまに考えた結果である。人間には動物にできる多くのことができない。たとえば卵を生むなどのことができない。反対に多くの動物は人間にできることができない。魚は足で歩けないのである。しかし、すべての獣と人間との間にあるもっとも大きな相違点は、笑うことができるかどうかということであって、笑いの能力こそ唯一、人間を他の動物と区別する——とアリストテレスは考えた。